

## 震災から5カ月、今被災地の現場は—

前川 智映

東日本大震災から5カ月以上が過ぎた。3月11日午後2時46分、三陸沖で発生したマグニチュード9.0の大地震。千年に一度とも言われる大地震は、最大40メートルにもなる巨大津波で多くの尊い命と平穏な日常を奪い去った。8月10日現在、死者は1万5689人、行方不明者は4744で計2万433人にもなる。テレビでは繰り返しそのときの映像が流され、その悲惨な状況に世界中の多くの人が胸を痛めた。それでも、ニュースというものはどれだけ世間を震撼させるものであっても、時間が経過するにつれテレビなどでほとんど流れなくなってしまう。人々の関心も他のところに移り、徐々に忘れ去られていく。

しかし、現実はどうなのだろう。震災から5カ月近く経つのに、未だに行方が分からない人が5000人近くもいる。震災による避難者数は未だに8万7063人(7月28日現在)もいる。多くの人が大切な人、町、生活の糧を奪われ、不便な生活を強いられている。そんな被災地の現状を自分の目で見て、自分にできる限りのことをしたい。そういう思いを胸に、8月5日から4日間のボランティアツアーに参加した。

訪れた場所は岩手県陸前高田市だ。人口2万4千人ほどの小さな町であったが、地震が引き起こした大津波によって市の中心部は崩壊し、全世帯の半数以上が家を失った。そして死者1526人、行方不明者が543人と人口の約一割にもなる尊い命が奪われた。津波が奪い去ったものはあまりにも大きい。現地ではいまだに大量の瓦礫の山が、処理されるのを待ってあちこちにうず高く積み上げられている。家や工場などの建物はことごとく破壊され、生活の糧となる水田や漁港は壊滅状態。津波にのみ込まれ、瓦礫の山と化した町の人々は避難所や仮設住宅の生活を余儀なくされ先の見えない不安を抱えながら日々を過ごしている。



そんな状況だからこそ、地域が一つになって復興への第一歩を踏みだそうと、陸前高田市の伝統の夏祭り「うごく七夕」が開催された。今回ボランティアに任されたのはこの祭りの手伝いだった。会場の設置や後片づけに関する仕事だ。うごく七夕祭りは伝統の慰霊行事であるが、震災に伴う人的、物的被害で一時は開催が危ぶまれたが、多くの支援を受け開催にこぎつけた。高田小学校の校庭で行われたこの祭りでは、被災を免れた山車など3台の山車が登場した。提灯には「復興」「絆」「感謝」などの文字が書かれ、震災の犠牲者への祈りとともに、震災からの復興への決意を感じさせる。法被に身を包んだ若者や子どもたちが山車に乗り込み、力強い掛け声とともに太鼓を打ち鳴らす。山車の周りには多くの人が集まり、一緒に声をだして祭りを盛り上げる。

実際、彼らの多くは被災者である。陸前高田にはわかっているだけでも両親を失った子どもたちが27人もいる。ここ高田小学校には両親だけでなく、おじいさん、おばあさん、妹までみな津波に流されてしまった生徒もいるという。それに住みなれた町は瓦礫の山と化し、壊滅状態だ。自分の目の前で友だちや両親など大切な人や、自分の生まれ育った町が流されるのを見た子どもたちの心の傷は計り知れない。力強く太鼓をたたき彼らの姿からそんな言葉にならない痛みを感じて涙が出た。それでも、被災した子どもたちの多くが心に大きな傷を負いながらも、様々な人たちに助けられたことに感謝し、将来自分も困っている人を助けたいと言うのだそうだ。



筆者も小学生の時に阪神大震災で被災した。自宅は半壊で済んだが、神戸に住む祖父母の家は全壊した。祖父母は自宅を再建することが叶わず、震災から16年経つ今も復興住宅という市営住宅に住んでいる。それでも神戸の街はかなり復興した。神戸を訪れる人は16年前に震災があったということが信じられないと言う。表面上復興が進み、震災の傷が見えなくなると人々は震災のことを忘れる。震災に対する関心が薄れ、震災について話さなくなる。そんな時にまた震災が起こる。その繰り返しだ。今、日本では阪神大震災の教訓が生かされなかったという反省の声が随所で聞かれる。もちろん自衛隊や緊急援助隊などによる救助活動体制や報道やボランティア受け入れ体制など、教訓が生かされたものもある。しかし、政府の対応や行政間の協力体制など問題も浮き彫りになった。

今回の震災は、阪神大震災のときにはなかった津波や原発問題も同時に起こり、なかなか復興の兆しが見えない。しかし、被災地ではよりよい町、災害に強い町をつくろうと皆が智慧を出し合っている。市のボランティアセンターには全国から毎日ボランティアがたくさん駆け付けている。多くの人たちが復興のために自分のできることに全力を尽くしている。被災地は着実に復興の道を一步一步あゆんでいる。



ボランティアセンターに集まる人たち

私たちに何ができるだろうか。現地の人は言う。それは「被災地のことを忘れないこと」だと。現地の方にいただいたメッセージを紹介する。

「もともと何もない田舎ですけど、大好きな海も海岸も学校も馴染みのお店も全部なくなってしまって、地元の人間には耐え難い状況なんです。でも、東北の人は忍耐強いし温かいし心配かけまいとみんな元気にしてます。高田に来てくださるみなさんに本当に感謝しています。

何かしてほしいのではなく、忘れないでいてほしい、まだたくさんの方がつらい思いをしていることをわかってほしい、これが高田の人間の考えです。来てくださって本当にありがとうございます。」

被災地のことを忘れないこと。それはなにげない日常に感謝することから始まる。住む場所があって、大切な家族がいて、学校に行けて、仕事ができ…そんななにげない日常が何よりも幸せなのだということ。被災者の方々はそのなにげない日常を取り戻すために日々努力しているのだ。

被災地に思いを寄せ、当たり前のことを当たり前でできることに感謝すること。そして、もっと安全でもっと住みやすい社会をつくるために私たちがそれぞれできることに全力を尽くすこと。それが残された人間の使命であろう。

写真・文＝前川 智映

(ソウル大学国際大学院アジア地域学科修士課程: [chie.maekawa@gmail.com](mailto:chie.maekawa@gmail.com))